

「三つよりの糸」

岩井健作牧師

コヘレトの言葉 4章 1節 - 12節

ローマ書 12章 9節 - 21節

「三つよりの糸は切れにくい」(コレレト4:12)

- 1、今日の箇所「改めて太陽の下に」(4:1, 7)とあるが、コヘレトを1章の初めから読んでみると「太陽の下に」がここまででも10回出てくる(1:3, 9, 14, 2:11, 17, 19, 20, 21, 3:16)。これはプトレマイオス王朝(紀元前323-紀元30, 16代にわたりエジプトを支配した王朝)の抑圧的支配を暗示する言葉である。「改めて」の語が、4章の「虐げ」を一層悲惨なものとして浮き彫りにする。
- 2、4章1-8節は3部に分けられる。①4:1-3。権力者の横暴の前に虐げられた者の涙を慰める者のいない空しい状況を見よ。死んだ人の方が幸いだ、生まれてこなかった者がより幸いだ、何故か「悪い業を見て(体験して)いない」。②4:4-6。生き甲斐を求める人間の労苦の空しさ。「片手を満たして、憩いを得る」は悪しき時代の生活の知恵か、「両手を満たして、労苦するより良い」。競争意識をもたず、他人の分を尊重しながら、穏やかな心で働くことを示唆している。③4:7-8 魂の安らぎを得ない富の追及は誰のためなのか。労苦というものは、あの人のためという愛があつてこそ意味がある。富が目的だけの「仕事人間」は「空しく不幸だ」。この言葉には新自由主義経済時代と重なる響きがある。
- 3、4章9-12節。さて、今のべたような時代をどう生き抜くのか。ヘレニズム文化(アレクサンドロス大王以来怒濤の如く流れてきた利潤優先、個人主義の生活様式、競争主義)に対して古いユダヤ文化の価値が見直される。「ひとりよりふたりがよい」「倒れれば、ひとりがその友を助けおこす」「ふたりで寝れば暖かい」「ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する」「三つよりの糸は切れにくい」。みな長い経験から生まれた諺的知恵の言葉である。生活の温みがある。(新約聖書ローマ12:9-21は倫理として語られている。ユダヤ律法にも倫理はあつた。が、コヘレトはその内実を知恵として述べる。倫理を知恵にまでに昇華させたのは、「太陽の下」の悪しき状況を生き抜いた人々であつた。
- 4、中の瀬重之神父は、コヘレトの解説テキストで、「三つよりの糸」に暗示される道を五つに纏めてる。「民が息づける社会構造の保護」「命に仕える宗教」「協同して働く」「分かち合い」「生活のささやかなことに楽しみを見出だす」。
- 5、教会宛てに、クリスマス献金支援先の「女性の家HELP (House in Emergency of Love&Peace)」から「ネットワークニュース」No. 65号が届いた。国籍、在留資格を問わない女性と子どものための緊急避難センターとして、シェルター活動・電話相談を行っている。最近ホームレスの日本女性も多いという。ここの働きは『希望の光をいつもかかげて。女性の家HELP20年』(2006年、日本キリスト教婦人矯風会)に詳しい。「父ちゃんは死んじゃったと帰国する子ら」。1996年ごろ「HELP日誌」に載った句だと言う。性暴力被害の移住女性とその子らが想像される。そんな中でなおこの運動と施設も「三つよりの糸」の働きをしている。